

日中科学技術

No.68

1993.12.20

発行所

日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島1-7-11
南新ビル6F 電話 03(3815)7241

野上茂吉郎記念研究奨励賞(第7回)
 伏見康治研究奨励賞(第5回)
 高度自動化研究奨励賞(第5回)
 アマダ科学技術研究奨励賞(第4回)
 有山兼孝記念研究奨励賞(第2回)

中国人留学生研究奨励賞贈呈式

1993年12月17日、上記5種の中国人留学生研究奨励賞贈呈式が、東京一ツ橋の学士会館において行われた。

優れた研究業績のある中国人留学生に対して、各賞状と副賞10万円を贈呈することを会告し、本会会員から推薦を募り、選考委員会において慎重に審査した結果、受賞者は下記の10名に決定した。

(氏名・該当賞・所属・研究題目)

(姓のアルファベット順)

(1) 陳海龍 (アマダ科学技術研究奨励賞)

東京大学 外国人研究員

「材料設計のためのデータシステムの研究開発」

(2) 陳農 (伏見康治研究奨励賞)

東京大学 大学院博士課程

「半導体レーザーの複合機能、高性能化」

(3) 範立 (アマダ科学技術研究奨励賞)

東京大学 大学院博士課程

「エネルギー変換および環境に関する研究」

(4) 黄子諒 (アマダ科学技術研究奨励賞)

東京大学 大学院博士課程

「遷移沸騰熱伝達機能の研究」

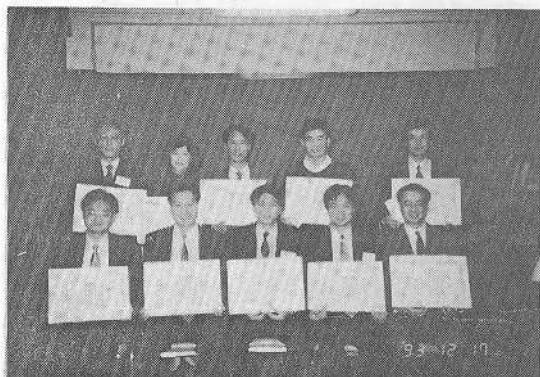
- (5) 廖捷凡 (野上茂吉郎記念研究奨励賞)
慶應大学 大学院博士課程
「含水無機微粒子のメカノケミカル反応機構の解明」
- (6) 馬要武 (高度自動化研究奨励賞)
長岡技術科学大学 大学院博士課程
「レーザーを用いた回折格子法によるひずみ測定法の研究」
- (7) 唐建志 (有山兼孝記念研究奨励賞)
理化学研究所 特別研究員
「ヘリウム及びヘリウム様イオンの高い励起状態の研究」
- (8) 姚培鑫 (野上茂吉郎記念研究奨励賞)
東京大学 外国人研究員
「微生物の培養の効率化と培養プロセスの応用」
- (9) 張韶華 (アマダ科学技術研究奨励賞)
東京大学 大学院博士課程
「既存高層建物の振動特性と耐震信頼性評価」
- (10) 鍾寧 (高度自動化研究奨励賞)
東京大学 大学院博士課程
「知識ベースとデータベースの統合利用における知識の発見と管理」

今回は、例年にも増して大変優秀な研究が多かったため、アマダ科学技術研究奨励賞の贈呈枠を2名・野上茂吉郎記念奨励賞と高度自動化研究奨励賞の贈呈枠を1名ずつ増やすことにした。これにより受賞者は10名となった。(アマダ科学技術研究奨励賞は設定時より2名を対象としている。)

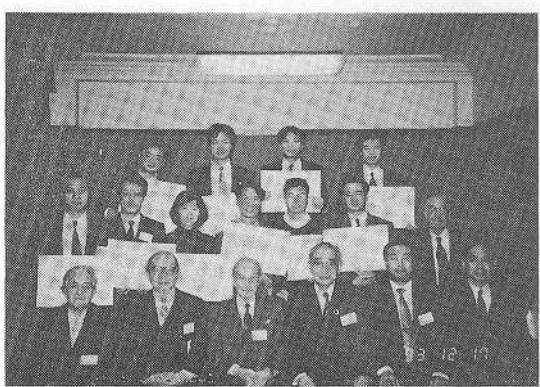
贈呈式では、橋口隆吉会長から賞状と副賞が10名の受賞者に贈呈された。贈呈式には、本会役員・会員のほか、故野上茂吉郎氏正子夫人・伏見康治氏・窪田雅男氏((財)高度自動化技術振興財団)・長谷見稔夫氏((株)アマダ)・張松林氏(中国大使館)にもご列席いただいた。

また、贈呈式に引き続き受賞者による研究発表会が行われた。

以下に贈呈式の写真・賞状のコピーを掲載する。



賞状を手に：前列左より廖捷凡・黃子諒・範立・陳農・陳海龍、後列左より鍾寧・張韶華・姚培鑫・唐建志・馬要武の各氏



贈呈式出席者全員で



アマダ科学技術研究奨励賞状の写し



伏見康治研究奨励賞状の写し



アマダ科学技術研究奨励賞状の写し



アマダ科学技術研究奨励賞状の写し



野上茂吉郎記念研究奨励賞状の写し



アマダ科学技術研究奨励賞状の写し



高度自動化研究奨励賞状の写し



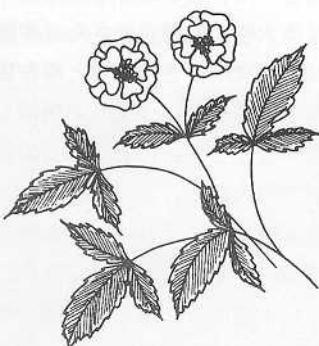
高度自動化研究奨励賞状の写し



有山兼孝記念研究奨励賞状の写し



野上茂吉郎記念研究奨励賞状の写し



第6回日中科学技術シンポジウム 開催報告 「結晶の成長と評価'93」

日中科学技術交流協会 理事 小川 智哉

第6回日中科学技術シンポジウムは「結晶の成長と評価'93」という副題のもとに、平成5年10月19・20日、学習院創立百年記念会館で開催され、中国から16件、日本から10件計26件の論文が発表された。

このシンポジウムでは、話題が発散し討論が散漫になるのを防ぐため、中国が一方の雄として君臨している非線形光学結晶と日本が得意とする半導体結晶に演題を限定すると同時に、数人の方には是非ご参加いただきたいと予めお願ひした。それ以外の人選は、今回の訪日団長でもある彭瑞伍教授（中国科学院・上海冶金研究所）によってなされた。中国科学院所属の研究員10名、教育委員会関連の学者を5～6名という条件で人選を依頼したところ、16名の訪日団員が決まった。

また、日本に留学し帰国後中国で優れた業績を挙げておられる方で、日本側ホストからこのシンポジウムに招待したいと申請のあった吳以成教授（中国科学技術大学）と譚奇光さん（中国科学院・福建物質構造研究所）を渡航費と滞在費の実費全額を日本側で支払うという条件で招待した。これに、自費参加者1名を含め総勢19名の訪日団を協会招聘の形で受入れた。

シンポジウムのプログラムは、彭教授が推薦して下さった方々の演題から、これにできるだけ整合するように日本側演者を選定し、参加をお願いする形で作成した。この作業中、10月18・19日の両日、甲府で人工鉱物工学会が開催され、日本で

非線形光学結晶関連の研究をしておられる方が19日のシンポジウムに参加することが不可能であることを知り調整したが、何名かの方からは参加を断られた。しかし、発表演題間の整合は一応取れ、有益な討論がなされたのではないかと自負している。

また訪日団員に対し、シンポジウムのポスト・コンファレンス・ツアーとして、10月21日午前に理学電気（株）拝島工場、午後は（株）日立製作所・中央研究所を参観するA班と、午前中に三菱マテリアル（株）中央研究所を参観するB班を計画した。A班の参加者は9名、B班は5名であった。

今回のシンポジウムは、平成不況といわれる時期と重なったため、思うように募金が集まらず、赤字一切を個人負担で行う決心をして準備スタートしたのであったが、初めに考えたように赤字とはならずに終了することができた。ご協力下さった各位並びにご援助を賜った下記団体・企業等に心より御礼申し上げる。

日本学術振興会・第145委員会、学校法人・学習院、（社）応用物理学会・結晶工学分科会、三井金属鉱業（株）、ラビアス電気（株）、（株）日立製作所・中央研究所、（株）信光社、ラトック・システム・エンジニアリング（株）、（株）モリテックス、（株）日本板硝子材料工学助成会、（財）實吉奨学会、キンセキ（株）、日本電気（株）材料開発センター、信越半導体（株）、（株）リガク。

〔本会派遣訪中科学者報告〕

中国の材料強度関係の研究機関を訪ねて

長岡技術科学大学副学長 矢田 敏夫

1.はじめに

この度、日中科学技術交流協会の橋口隆吉会長先生はじめ、各先生の御厚情をいただき、北京、西安、上海の研究機関等を訪問することができた。中国だけは今回が初めての訪問であったために、見聞するすべての物に感動させられ、教えられることが多々あった。ここに、日本および中国の先生方に厚く御礼を申し上げる次第である。

2.訪問の内容について

日程は、1993年（平・5）10月17日（日）に成田発で北京に向かい、北京で4泊5日、その後、西安で3泊4日、終りに上海で3泊4日を経て、10月27日（水）に成田に帰国した。以下に、訪問機関の内容等について、またその他の見学地のことについて列記したい。

(1) 北京地区（4泊5日）

1) 10月17日（日）。成田発(10:00)-北京着(13:15)、JL781。中国科学院の高級日本項目客員教授の姚佩君先生が、北京滞在期間中、すべての点でお世話して下さった。

なお、当夜、元留学生で天津の研究機関に幹部

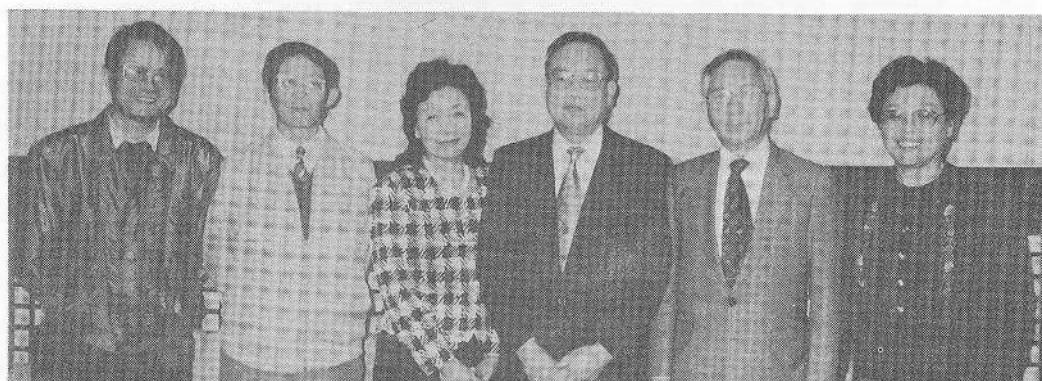
として勤務している李金奎君がホテル西苑飯店までわざわざ来てくれた。8年ぶりのなつかしい再会であった。

2) 10月18日（月）。天安門広場、故宮博物館、天壇公園を見学した。雄大さ、偉大さに圧倒されることばかりであった。晴天で暖かく、どこも各国の観光客で満員盛況であった。

夜は中国科学院の歓迎パーティを北京飯店で開催していただいた。王佛松副院長、白以龍力学研究所副所長、王克仁副研究員、および姚先生と私達夫婦が出席した。日中の話、世界の話をはじめとして、とても楽しいパーティであった。

3) 10月19日（火）。力学研究所を訪問して、“Nonlinear Analysis of Strain Concentration Occuring at Welded Joint with Initial Distortion in a Spherical Pressure Vessel” の論文を主体にして講演を行った。製品精度の計測技術、解析技術等について多くの熱心な質問があった。

なお、この講演会と見学を行っている間に、妻は姚先生の案内で頤和園を見物し、そして買物市



10月18日(月)歓迎パーティ：北京飯店にて
左より王克仁助教授・白以龍教授・矢田智子・王佛松教授・姚佩君教授

場を楽しんだようである。

4) 10月20日(木)。萬里の長城と明の十三陵を見物した。期待していたものを更に超える偉大さに敬服した次第である。

(2) 西安地区 (3泊4日)

1) 10月21日(木)。北京から西北航空で12:40に西安に着いた。西安分院の張小安副所長が大変多忙な毎日であるのに、4日間すべてを私達のためにきわめて友好的なガイドをして下さった。北京における姚先生と共に西安の張先生に心からお礼を申し上げる次第である。

空港から直ちに、咸陽市民芸術館を見学し、そして新世界大酒店という新しくて便利な位置にあるホテルに予約変更して下さった。夕方、市街の中心にある有名な鐘楼を見学した。

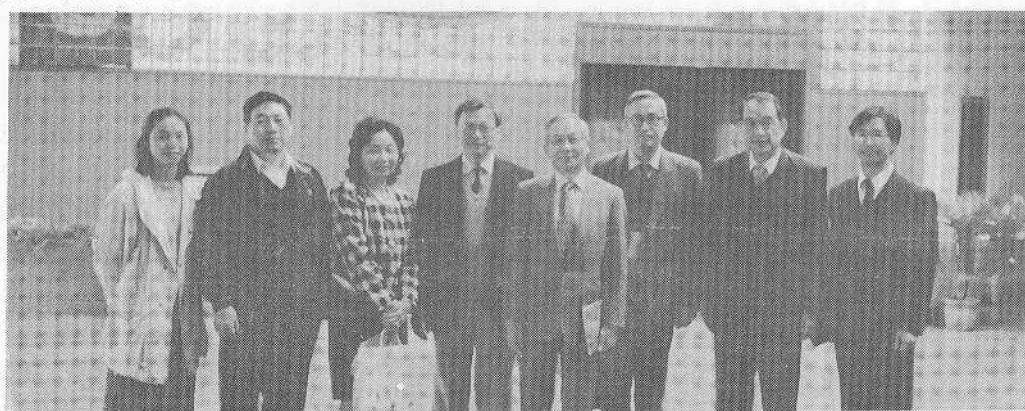
西安は偉大な遺跡等が多い。日本との古い関係も豊富である。西安での4日間は人類の古い時代の技術に圧倒されることばかりであった。

2) 10月22日(金)。中国科学院西安分院を訪問した後、次の5ヶ所を見学した。すなわち、秦始皇帝兵馬俑坑博物館、華清池、碑林博物館、小雁塔、城壁である。

3) 10月23日(土)。西安交通大学を訪問した。許晋学校長助理、史耀武機械工程系主任、要昌中溶接研究室主任、李長久同室教授と双方の大学の研究状況等について意見交換を行った後、学内の関係施設を見学した。100トンのインストロン試験機が設置済であり、産学共同研究が活発に行われていることを知った。

なお、西安交通大学から本学の修士課程に留学した後、東京大学の博士課程に進学して学位を取得した学生が数日前、長岡にいるホストファミリーの家で盛大な結婚式をあげたこと、それに私達が出席したことなど、楽しい話題の交換が続いた。

午後は、半坂遺跡博物館、陝西省博物館、大雁塔を見学した。この3日間、西安地区的遺跡から、



10月23日(土)西安交通大学エントランスホールにて：左2人目より張小安副所長・矢田智子・許晋学校長助理・史耀武教授・要昌中教授・李長久教授

中国の歴史的スケールの大きさを改めて認識した。

(3) 上海地区 (3泊4日)

1) 10月24日(日)。西北航空で西安から上海に17:10についた。上海での4日間は、上海分院の開建偉さんがお世話して下さった。

2) 10月25日(月)。上海硅酸塩研究所訪問。江東亮副所長、馮楚徳副教授と意見交換、見学を行った。セラミックスは中国では古い伝統をもつ技術であり、最近も新しい技術を意欲的に開発して

いる。なお、ここはきわめて大きな研究所であり、建替え工事が進行中であった。

当日、時間的に若干の余裕があったため、前々日に開通したばかりの超大型斜張橋に案内して下さった。中国の独自技術による建設であることを世界的に大きく報道された橋梁である。

3) 10月26日(火)。午前中は上海交通大学を訪問した。機械工程系の竜澄教主任教授、汪建華副教授、その他と工業技術教育等に関する意見交換

を行った。江沢民総書記はこの大学の電気系の出身であるため、そのことに関連する事項をいくつか見聞した。美しい大きな大学である。

午後は中国科学院上海分院を訪問し、王志勤院長と親しく懇談することができた。そして、夜は同分院所有のヨーロッパ風建築の招待所において、送別のパーティを開催していただいた。思い出に残る暖かいパーティであった。

4) 10月27日(水)。開さんの案内で豫園を見学した。その後、上海空港から長崎経由のJL796便で成田に19:25に到着した。

なお、上海分院では、日本からの学者の殆どを開さんが一人で受け持っているようであり、その日も東京の某大学教授が予定外にはいったとのことで、休日出勤が続く多忙な毎日を送っていると聞いた。

3.まとめ

はじめての訪問で、大きな国から多くのことを

学んで帰ってきた。帰国後は中国に関する話題を直ぐ身近に感ずるようになった。この度の中国訪問については、各種の事項について数多くのことを記述しなければならない。しかし、ここではその数例を列記して報告書とし、併せて関係各位に謝意を表したい。

①中国の10月は気候が良い。晴天の下に、世界各国からの観光客であふれている。

②中国人達は時間厳守である。打合せた時間通りにスタートし、終了する。

③西安などの内陸の学生達の勤勉さに感動した。一例をあげると、咸陽市民芸術館では低学年の女子大学生が、お客様を奪うように取り合って、ガイドをしながら、日本語あるいは英語の実地研修を懸命に実行していた。

④全般的にみて、トップクラスの管理者は温厚で、きわめて謙虚な人格者ばかりであった。豊富な人材を持つ大国であることを再認識した。

〔日中科学技術事情〕

長岡と大連の科学技術交流

長岡技術科学大学教授 伊藤 廣

著者の勤務する長岡技術科学大学は、新潟県に所在し、環日本海域の中核に位置している。したがって、東アジア諸国との国際学術交流を積極的に推進し、とりわけ中国との交流はきわめて活発である。その成果の一つとして、長岡技術科学大学は1988年に中国でも有数の理工系大学である大連理工大学と学術交流協定を結んだ。

中国は、重工業化政策による高度経済成長をはかるため港湾施設の近代化及び発電所の建設が積極的に進められている。火力発電所の燃料としては中国大陸部に産出する豊富な石炭の活用が不可欠である。そこで、港湾を拠点基地として石炭を有効、かつ、安全に貯蔵、搬送する物流システム

の建設が求められている。

このような機運を背景に、筆者の研究室は文部省の科学研究費補助金を得て、1991年度から3年間、中国における石炭ふ頭の物流システムについて最適設備計画法を確立するための学術研究を行うことになった。

第1年目は大連から研究者を招請し、世界最先端の設備を有するわが国の石炭ふ頭の実情を調査し、現在の技術的諸問題や、将来の展望に関する情報を収集した。その成果をもとに、コンピュータシミュレーションによるシステム解析の基礎が築かれた。

第2年目は、筆者の研究室から研究者が中国の

大連を訪問し、中国における石炭ふ頭の現状調査ならびに中国の研究者、技術者との討論が繰返された。写真1は大連理工大学を訪問したプロジェクトメンバー一同である。

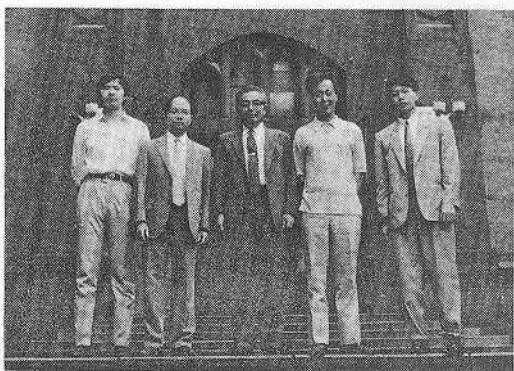


写真1：大連理工大学を訪問した
プロジェクトメンバー一同

最終年である第3年目は、日中の研究者がわが国に参集し、これまでに開発してきたシステム解析の基本ソフトウェアを、実用化するための研究活動を行い、最適設備計画の実用例を提案した研究報告書を作成された。写真2は石炭荷役運搬システムの主要機種である連続アンローダを示す。

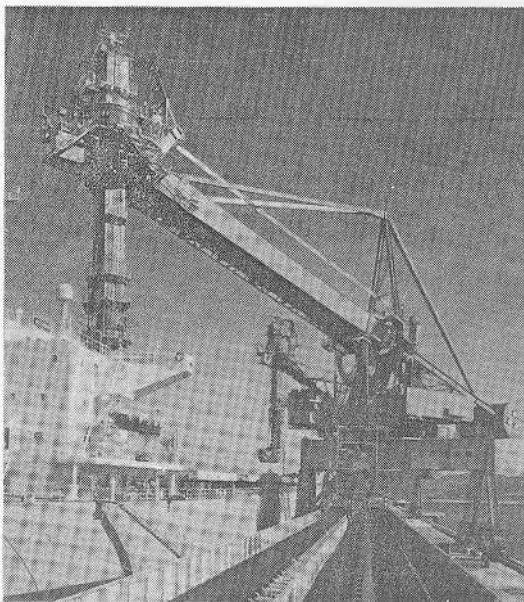


写真2：石炭荷役運搬に
用いられる連続アンローダ

このように、長岡技術科学大学と大連理工大学との国際学術交流は日中いづれの研究者にとっても大きな成果が得られた。

国際交流においては、当然のことながらことばの障壁が問題である。筆者らのプロジェクトチームの場合もお互いに相手国の言葉を用いることができず英語で議論することが多かった。両者に熱意と忍耐の精神があれば、ことばの問題は克服されるものである。

ただ、今回の国際学術交流もすべてが順調に進んだわけではない。中国との学術交流に際して、留意すべきことを簡単に述べる。自由主義のわが国と、社会主義が色濃く残る中国ではものの考え方方が基本的に異なることは当然であるが、お互いが主義の相違を認め、理解に努め、相手を容認する寛大さが求められる。ゆとりなくしては寛大にはなり得ないので計画を立てる時点で、大幅な時間的ゆとりを設けておかねばならない。

また、各人が母国を考えが正常であると思い込むと、しばしば、過ちに陥るものである。外国人から見れば、日本人は特異な考えを持つ集団であると思われることを常に覚悟しておく必要がある。

中国は世界の大國である。わが国にとって、中国との交流は不可避であり、お互いに末長くよき隣人であらねばならない。眞の国際交流とはなにかを、深く考えさせられる学術交流ではあった。

〔本会派遣訪中科学者報告〕

水環境関係研究機関訪問記

千葉工業大学工学部 潤 和夫

中国科学院の招請にもとづき、中国科学院所属の研究所及び大学と学術交流の目的で1993年10月14日から25日の12日間、訪中した。

訪問した研究機関は生態環境研究中心（北京）、水利水電科学研究院（北京）、国際泥沙研究培訓中心（北京）、北方交通大学建築・土木系（北京）、長春応用化学研究所（長春）及び吉林大學環境科学系（長春）である。

最初の訪問先は10月15日（金）の生態環境研究中心である。研究所副主任の黄駿雄教授より組織、歴史、研究内容について説明を受けた。

当研究中心は1975年中国科学院環境化学研究所として創立され、1986年同研究所に動物分野が加わり、生態環境研究中心へ改称され、現在に至っている。所員は総勢500名。研究・管理者400名で、副教授以上が100名、講師が200名、助手その他が100名である。13研究室1編集室を備えており、その中の水環境化学実験室は世界銀行の借款による重点実験室である。この他、大学院を併設しており、さらに、60名の博士・修士の学生が在籍しているとのことである。

主要研究分野は生態学（エコシステム、生態汚染、地域生態）、環境化学（大気化学、大気汚染制御、水化学、水質汚濁制御、高分子膜など）、分析化学（無機、有機、分析機器）、有機合成（雨、廃棄物（農業、生活））である。ここに言うエコシステムとは、都市人口、土地利用等に関する研究も含めた分野を対象と考えているようである。その他の重要な業務として、雑誌（情報資料、編纂）及び国際共同研究（ドイツ、オランダ、タイ、カンボジア、イタリアなど、南アフリカを除いた国々との交流）が挙げられる。

装置としてはX線フローレッセンス・スペクトロメータ、レーザ・スペクトロメータ、GC/MS、UVメータ、イオンクロマト、ガスクロマトなどが各部屋それぞれ1台の割合で設置されていた。

黄教授の他、尹澄清副教授、王菊思教授、王晶女史等々、生態環境研究中心の方々へ私の持参した資料「粘性を有する堆積底泥の流水による洗掘に関する新たな考え方」および「日本の水域における底泥汚染に関する解析」について概略説明を行った。同研究中心でも、目下、底泥・水層間での水質汚濁構成物質の移動に関する研究を進めているとのことであった。

王晶女史および尹先生（水環境化学、水生態担当）の案内で分析機器関係研究施設及び直径3m程の平面回転水路を用いた底質内物質の溶出実験に関する見学・説明を頂いた。回転水路による本格的な研究はこれから、とのことであったが非常に興味あるものであった。

15日午後の訪問先は北方交通大学である。ここへの訪問は当初のスケジュールには含まれていなかったが、何処から聞き付けて来たのか、同大学の輸送模擬中心の副主任である張喜先生を通して生態環境研究中心の王晶女史へ申し出があったためとのことである。

この北方交通大学では、建築・土木系の周錫久教授以下6名が雲南省の岩土流の解析ビデオを用意して待っていた。

緑の多い森林地帯に敷設した鉄道線路が問題の発端である。この鉄道は鉱山資源を搬送するためのものであった。にも係わらず、線路の周囲には人が集まるようになり、1958年から樹木の伐採が始まり、1980年代には丸裸状態になってしまった。

1950年から現在までの6度の大地震と山々の荒廃とで、斜面では毎年、岩土流（土石流）が発生するようになり、その量は8,000t/km²にも達したことである。またさらに、沢をまたぐように作られていた橋梁が度重なる土砂堆積のために、今や堆積土砂をくり抜いてのトンネルと化してしまっている。このように荒廃した環境の再生をどのように進めるかを解析したものである。緑化啓蒙、技術的検討、人口制御、環境基金、環境法、環境保全研究等の総合解析についての説明を受けた。規模の大きさと重要性に改めて認識させられた次第である。

ビデオ説明の後、準備してきた資料の中から、共通すると思われる解析手法について、OHPを用いて説明をさせて頂いた。またさらに、リモートセンシング・データの取り扱い方等々、岩土流問題と併せて活発な討議を重ねた。

16日(土)には水利水電科学研究院を訪問した。ここは環境保全・保護を基軸とする生態環境研究中心に相対応する研究所であるとも言える。1991年に一度訪問しているが、時間の制約から施設の見学はほとんど出来ずじまいであった。今回は同研究院の防災環境影響評価研究センター主任の劉樹坤教授より研究院の歴史、組織、規模等について詳細な説明を受けた。当研究院は1958年に設立され、14の研究所と32の試験施設からなっている。また、大学院も併設されている。

施設見学は泥沙研究所、水力学研究所、耐震研究所、遠心力試験室、冷却水研究所、水力機械研究所である。

泥沙研究所では河道の決定、取水堰及び放流口の位置の決定、干潮区間でのSS対策、冷却水研究所では干潮域での冷却用水の取水口と排水口との相対的な位置の決定、水力学研究所では三峡ダムに関する種々の模型実験施設、減圧（キャビテーション）実験施設等々、まる一日をかけて施設の説明を受けた。ここで、三峡ダムについては1993年6月のICHE-'93(ワシントンD.C.)で多くの報告がなされている。水資源開発の水棲生物を含む生態系への影響など、環境保全への十分な配慮はこれからの大変なテーマになるように感じられた次第である。

18日(月)は水利水電科学研究院に併設されている国際泥沙研究培訓中心を訪問した。ここは1984年UNESCOの援助を受けて設立された施設で、中国国内・外への広報および研修のためのセンターである。開発途上国からの技術者への泥砂に関する研修、“International Journal of Sedimente Research”等の雑誌の出版を主な業務としている。

ここでは徐明権教授及び譚穎教授のお二人からセンターの説明を受けた。さらに、当研究培訓中心では黄河や長江などを対象とした高濃度泥水に対する知見が豊富であり、そのレオロジー的挙動について意見を伺うことができた。

ホテルへの送迎役をお引き受け頂いた范昭女史は技術研修のため1994年来朝の予定だそうである。研修テーマは聞き落してしまったが、徐・譚両先生との話の続きをできればと、楽しみにしている次第である。



北京市内のビル群、中央の塔は北京テレビ塔

19日(火)は北京から長春への移動日である。

20日(水)は長春応用科学所を訪問した。ここでは副所長の席時権教授、研究室主任の丁孟賢教授、何天白教授らが私を待って下さっていた。

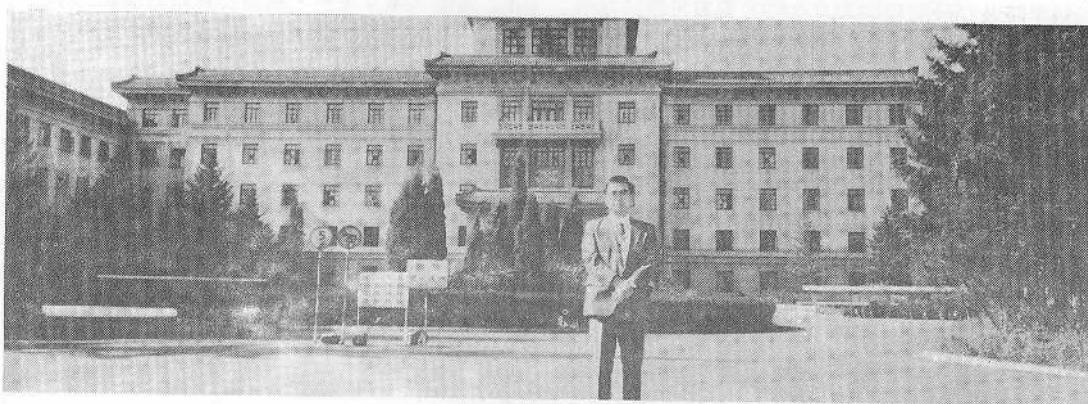
この研究所は1948年に設立され、1952年に長春応用科学院となり、現在に至っている。1958年には放射線化学の研究もスタートしている。1978年には大学院を併設、今までに240名の院生を世に輩出しており、さらに、300名の博士・修士の学生が在籍しているとのことである。

主要研究分野は高分子化学及び物理学、物理化学、無機化学、分析化学の4つから構成されてお

り、27の研究施設を、また、280名の教授を含む1400名の所員をかかえている。さらに、開発公司を付属機関としてかかえており、高分子・熱処理化学を利用してのフィルム材料の生産などを手掛けているとのことである。

その他、“分析化学”と“応用化学”的編集・出版を行っている。

環境科学関連の研究としては、天然資源開発(採掘)からの河川水の水質保全に関する研究がなされているが、有害物質等、点原公害に対する対策の域を脱しきれていないように感じた。



長春応用化学研究所にて 筆者

21日(木)は吉林大学環境科学系を訪問した。吉林大学では環境科学系の杜堯国教授および化学系の崔湘浩副教授から学内の施設について説明を頂いた。杜先生とは“第4回日中科学技術シンポジウム「大気汚染に関する日中シンポジウム」(1991年11月早稲田大学で開催)”のために訪日されて以来、また、崔先生とは1年振りの再会でもあった。杜先生の目下の大気汚染研究のお話を伺い、また、北京と長春との飲料水の水源・水質の相違など詳細な説明を受けた。長春の水道水源は松花江であり、浄水プロセスは日本から導入したものであるとのことである。

翌日(22日(金))は長春に初雪が舞い、非常に寒い日であった。日本を立つ前に崔先生から「寒くなるので着る物を沢山持つて来るように」との

連絡を受け、準備万端。北海道育ちの……であつたが、予想外に寒く、一日中歯がガタガタの鳴りっぱなし。中国の冬の始まりを全身で感じた次第である。

23日(土)は弱々しい晩秋の陽に送られて松花江・松花湖と中国東北部の電力需要で最も重要である豊満発電所・ダムの見学にでた。この豊満ダムと豊満発電所は戦前日本の技術で作られたもので、寄る齧波に勝てず、見学した時は重力式ダム本体のコンクリート継ぎ目部分から漏水しており、人々がその修理に慌ただしく動き廻っていた。長さ60メートルのワイヤーを幾本も千鳥にダム頂部から垂直に埋め込み、それにオイルジャッキでプレストレスを加えて漏水を食い止めようとするものである。

以上、この度の訪中で強く感じたことは大学以外の各研究所でも学位授与機関を兼ねていることである。どの研究者も研究意欲には高いものがあり、中国の学術面での急激な進歩発展の息吹を感じずにはいられなかった。また、豊満ダムの修理で代表されるように、中国（北京、長春）いずれの研究所においても施設は大切に使用されており、高額分析装置の部屋へはスリッパに履き替えて入室するなど、気配りの程がうかがえた。

最後に、このような機会を与えて下さった日中科学技術交流協会ならびに中国科学院に感謝致します。また、訪中の間、北京及び長春において中国科学院及び研究機関の方々に大変お世話になりました。ここに厚くお礼を申し上げます。

第40回理事会議事録

日 時：1993年9月21日(火) 13:30～16:00

場 所：一ツ橋学士会館 303号室

出席者：会長 橋口隆吉 副会長 菅野昌義
理事 窪田雅男 宗宮重行 土屋喜一
常山昌男 藤田良雄 伏見康治
以上のか委任状提出者23名

1. 前回議事録確認
2. 先端材料科学に関する日中シンポジウム開催報告
3. 結晶成長シンポジウム準備中間報告
4. 先進エネルギー・核融合／核分裂炉工学シンポジウム準備中間報告
5. 中国側招待訪中科学者派遣について
6. 本年度中国人留学生研究奨励賞受賞者審査・贈呈式・研究発表会について
7. 日本で開催され、本協会が主催する日中シンポジウムに関する内規(案)について

第41回理事会議事録

日 時：1993年12月10日(金) 13:30～16:00

場 所：一ツ橋学士会館 310号室

出席者：会長 橋口隆吉 副会長 菅野昌義
理事 弥永昌吉 神原 周 土屋喜一
藤田良雄 伏見康治 宮島龍興
監事 矢田敏夫

以上のほか委任状提出者21名

1. 前回議事録確認
2. 結晶成長シンポジウム開催報告
3. 先進エネルギー・核融合／核分裂炉工学シンポジウム準備中間報告
4. 本年度中国人留学生研究奨励賞受賞者審査・贈呈式・研究発表会について
5. 会計状況について

目 次

中国人留学生研究奨励賞贈呈式	1
第6回日中科学技術シンポジウム	
「結晶の成長と評価'93」開催報告	
理事 小川 智哉	4
中国の材料強度関係の研究機関を訪ねて	
矢田 敏夫	5
長岡と大連の科学技術交流	
伊藤 廣	7
水環境関係研究機関訪問記	
瀧 和夫	9
第40回理事会議事録	12
第41回理事会議事録	12